

日本財団補助金による

1996 年度財団法人日中医学協会助成報告書

－調査並びに研究に対する助成－

1996年 3 月 7 日

財団法人 日 中 医 学 協 会

理 事 長 中 島 章 殿

研究代表者氏名

真柳 誠



所属機関名

茨城大学人文学部

職 名

教授

年齢

46 才

所 在 地

〒310 水戸市文京 2-1-1

電話 029-228-8194 内線(直通)

1. 研究課題

中国で散佚し日本に伝存する明代古医籍の系統的調査研究

2. 研究期間 自 1996 年 4 月 11 日 ～ 至 1997 年 3 月 15 日

3. 研究組織

日本側研究者氏名

小曾戸 洋

(46才)

所属機関

北里研究所東洋医学総合研究所

職名

部長

中国側研究者氏名

王 鉄策

(45才)

所属機関

黑龙江中医药大学医史教研室

職名

副教授

4. 研究目的、方法、成果と考察、結論の形式で、A4版にて4,000字以上で報告し、研究成果の発表予定についても記載して下さい。尚、論文発表に当っては、日本財団補助金による旨を明記して下さい。

5. 収 支 決 算 報 告

1996年4月11日交付通知のあった研究課題 中国で散佚し日本に伝存する明代古医籍の系統的調査研究 についての収支決算を行ないました。関係書類を添えて、次のとおり報告します。

交付を受けた金額	支 出 内 訳				
	消耗品費	謝 金	旅 費	そ の 他	合 計
1,000,000 円	268,315 円	11,600 円	896,854 円	76,795 円	1,253,564 円

支出費内訳（消耗品、謝金、旅費、その他の項目別に記載・別紙可）

区 分	金 額	使 用 目 的
消耗品費	93,602 円	中国内宿泊費
	46,605 円	中国内食費
	39,520 円	首届海峡两岸中医学文献——研讨会登録宿泊費(真柳・王)
	2,582 円	中国内医療費・検査費
	86,006 円	日本内調査宿泊費
謝金	11,600 円	礼品代
旅費	446,000 円	真柳・王の日中往復、上海→黄山(学会)の飛行機代、旅行保険
	131,224 円	真柳・王の中国内移動費、成田往復
	319,630 円	真柳・王・小曾戸の日本国内調査移動費
その他	63,789 円	貴重文献複写、購入費
	12,806 円	日中間通信費、中国内通信費

中国で散佚し日本に伝存する明代古医籍の系統的調査研究

研究代表者	真柳 誠（茨城大学教授）
日本側共同研究者	小曾戸 洋（北里研究所部長）
中国側共同研究者	王 鉄策（黒龍江中医薬大学副教授）

研究目的

中国伝統医学の研究に古典籍を欠くことはできないが、中国に現存する明代以前の古医籍は種々の原因で清代以後の古医籍よりはるかに少ない。一方、江戸幕府は長崎で渡来書を優先的に購入し、幕府の江戸医学館でも中国医書を積極的に収集していた。両者の多くは明治政府に引き継がれ、現在の国立公文書館内閣文庫に到っている。また江戸期の大名や民間人も中国の古医籍を多数収集し、現在それらの多くが国公立の図書館等に所蔵されている。それゆえ日本に現存する明以前の古版本や古写本は相当な数に達し、中には中国で散佚した書が少なからず発見される。これを佚存書と呼ぶ。

これまでの調査から佚存古医籍のうち明代の書は宋元以前の書をはるかに上回り、その数は恐らく百をくだらないと予想された。ただし日本に現存する明医書の系統的研究はいまだなされておらず、とりわけ伝統医学書は現在も臨床に利用されうる実用書ゆえ、全貌の早急な解明が望まれている。これを中国現存書と慎重に比較検討するなら、内容的にも貴重な佚存医書が多数発掘されるのは疑いなく、その一部は今後の研究と臨床にも決定的意義を持つだろう。

対象と方法

対象とする明医書は、明代に成立した医書で、のち清代・李氏朝鮮時代・江戸時代までの復刻本・写本とし、近代以降の復刻本や写本はその範囲に入れない。また明代に成立した医書とは、明代に著述ないし加注・増補・編集された書までをいい、内容に本質的な変化を及ぼさない校正・加点は成立の範囲から除外した。

調査はまず真柳・王・小曾戸が日本と中国（台湾を含む）の蔵書目録ないし蔵書カードを対比し、中国になくて日本にある明医書、またそれと疑わしき文献を抽出した。さらにその蔵書数が多い国立公文書館内閣文庫（内閣）・宮内庁書陵部（宮内）・武田科学振興財団杏雨書屋（杏雨）・龍谷大学大宮図書館（龍谷）・京都大学附属図書館（京大）・前田育徳会尊経閣文庫（尊経）・国立国会図書館（国会）・大阪府立図書館石崎文庫（石崎）、それと疑わしき文献が見出された静嘉堂文庫・名古屋市立大学図書館・旭中央病院資料室にて実地調査し、貴重と判断されたものは許可が得られた範囲内でマイクロフィルム

・コピー・写真などの方法で必要部分や目録を複写した。また九州大学医学図書館（九大）と東北大学附属図書館（東北）の目録調査でも佚存と疑わしき明医書が見出された。

しかしこれらは即座に佚存書と確定できないので、目録上で書名・著者・成立年・出版年などが同一ないし近似した中国の蔵書について閲覧と調査の申請書を提出し、許可が得られた上海中医薬大学図書館・上海市中医文献館・南京図書館・南京中医薬大学図書館・重慶市図書館・北京図書館・北京大学図書館・中国中医研究院図書館において真柳と王が実地調査し、日本の調査記録と照合して佚存書の是非を判断した。現地で判断不能な書については、許可が得られた範囲内でマイクロフィルム・コピー・写真などの方法で必要部分や目録を複写し、帰国後に日本の図書館にて再度実地調査を行い、最終的に佚存書の是非を判断した。この調査資料に基づき、佚存の明医書について著者・成立年代・出版筆写年代の解明、および日本における伝承経緯について考察を行った。

結果と考察

佚存の明医書は明刊本・明写本・清刊本・清写本・朝鮮刊本・室町写本・江戸刊本・江戸写本の形態で、日本の10図書館に計 188点が所蔵されていた。この伝存形態別に所蔵先を上掲図書館の略称で表1に示す。これらの中には同版本や同版本に基づく模写本があり、そうした書目の重複を除くと計 119書目の佚存書が発見されたことになる。

表1より佚存明医書の半数強は明刊本で、ついで江戸写本・江戸刊本の順となり、それらだけで90%以上を占めることが分かる。その一方、朝鮮刊本・明写本・清写本が少ないのは江戸時代までの貿易からして当然だが、多量に輸入されていた清刊本には佚存明医書があまりにも少ない。これは佚存明医書が明代に刊行されたのち、清代ではほとんど復刻されなかったためと考えられる。また中国で価値が認められずに失われてしまうような明刊本・明写本・清刊本・清写本が、日本には計 104点も伝承された史実も知られた。他方、清代とほぼ重なる江戸時代ではそれら明医書の価値が認められて筆写され、あるいは復刻されたため、江戸写本・江戸刊本として計78点も現存している。これら明医書が日本にのみ伝承された背景を分析するため、佚存明医書の明刊本・江戸写本・江戸刊本ともに圧倒的多数を所蔵する内閣文庫本について、その来歴を伝存形態別に表2に示した。

内閣文庫は総1632点・956書目・11591冊の中国医書を所蔵するが、これまでの調査により宋・元・明・清の各時代にわたる佚存医書が総 204点・146書目あり、うち明医書は表1のように 154点と大多数を占めることが明らかとなった。これを表2で来歴別にみると、幕府の江戸医学館旧蔵書が過半数を占め、幕府の紅葉山文庫と同文庫に献納された豊後佐伯藩主・毛利高標の旧蔵書がこれに次ぎ、それらで佚存明医書ほぼ全体を形成している。幕

府両機関の蒐集と保存なくして、かくも多量の佚存明医書はありえなかったのである。ただし紅葉山文庫と毛利高標の旧蔵書は明刊本が主体であるのに、江戸医学館旧蔵書には明刊本もさることながら、それ以上に江戸写本が多く、医学館旧蔵だけで江戸写本全体ほぼすべてを占める。それらには医学館を主宰した多紀元簡・元胤・元堅ら父子の手跋が少なからず書き込まれており、彼らがきわめて積極的に筆写・蒐集したことを物語っている。内閣文庫につぐ宮内庁書陵部所蔵の佚存明医書10点中にも多紀氏旧蔵書が4点あり、まさしく佚存中国医書の過半は多紀氏の功といわねばならない。

結論

本調査研究により、中国で失われたが日本に伝存する佚存の明医書が10図書館に計188点・119書目発見された。それらは明刊本・明写本・清刊本・清写本・朝鮮刊本・室町写本・江戸刊本・江戸写本の形態で伝承されていたが、重複を除く少なからぬ書は世界に1点しか存在が知られていない孤本であった。これらの中国伝統医療と医学文化における貴重性は高く評価されねばならない。また佚存明医書の大多数は国立公文書館内閣文庫の蔵書で、さらにその多くは江戸幕府の医学館と紅葉山文庫の旧蔵書だった。とくに江戸医学館の旧蔵書は過半を占め、その蒐集と保存に努めた多紀元簡・元胤・元堅ら父子の功績は大きい。今後これら佚存中国医書の存在が日中ともに認識され、さらに復刻され、日本の伝統医療・医学が永年にわたり享受してきた中国医学の恩恵に、幾許たりとも報いることが期待される。

なお本研究の成果は、すでに1996年8月に中国・黄山市で連続開催された中医薬文献学会・医古文研究会共催の「首届海峡两岸中医薬文献・医古文及中医薬文化学術研討会」と中国薬学会主催の「第八届全国薬学史本草学術研討会」にて真柳と王がその一部を報告¹⁾・²⁾しており、小曾戸も一部をすでに報告³⁾した。真柳は別に報告⁴⁾を投稿しており、印刷中である。研究の全体は真柳・王・小曾戸の連名で『中華医史雑誌』に投稿を準備している。

既報論文

- 1) 真柳誠「関于幻雲引用的『東垣十書』」、『中医薬文献研究論叢』、北京・中医古籍出版社、47-49頁(1996、8)。
- 2) 王鉄策・張建偉「馬蒔著述研究」、『中医薬文献研究論叢』、北京・中医古籍出版社、116-119頁(1996、8)。
- 3) 小曾戸洋「明代の医薬書(18)」、『現代東洋医学』17巻2号、228-233頁(1996、6)。

- 4) 真柳誠「江戸時期渡来の中国医書とその和刻」、『歴史の中の病と医学』、京都・思文閣出版、頁未定(1997、3、20刊行予定)。

表1 佚存明医書の所蔵点数

	内閣	宮内	龍谷	杏雨	尊経	京大	石崎	九大	国会	東北	小計 (%)
明代刊	81	6	3	2	3	2	1	1			99 (52.7)
明代写		1									1 (0.5)
清代刊	1	1	3								5 (2.7)
清代写	1										1 (0.5)
朝鮮刊	1	2									3 (1.6)
室町写							1				1 (0.5)
江戸刊	14			2				1	1	1	19 (10.1)
江戸写	56		1	1		1					59 (31.4)
総点数	154	10	7	5	3	3	2	2	1	1	188 (100.0)

表2 内閣文庫所蔵佚存明医書の来歴

	江戸医学館	紅葉山文庫	毛利高標	昌平黉	不詳	林家	小計 (%)
明代刊	35	30	14	1	1		81 (52.6)
清代刊			1				1 (0.7)
清代写		1					1 (0.7)
朝鮮刊		1					1 (0.7)
江戸刊	8	1		2	2	1	14 (9.0)
江戸写	49	3	2	2			56 (36.3)
総点数	92	36	17	5	3	1	154 (100)